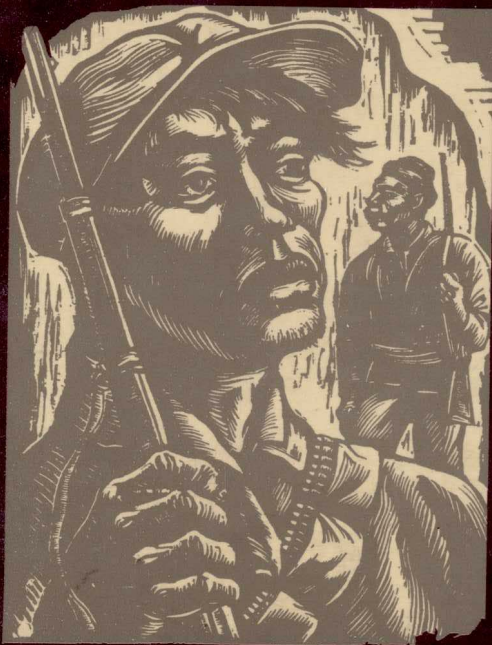


中国抗日战争史

石島紀之著



青木書店

中国抗日战争史

石島 紀之 著



青木書店

いしじま のりゆき
石島紀之

1941年 東京に生まれる

1963年 東京大学文学部卒業

現 在 茨城大学助教授

中国抗日戦争史

1984年12月1日 第1版第1刷発行

定価 1700 円

1985年2月10日 第1版第2刷発行

著 者 石 島 紀 之

発行者 山 根 襄

発行所 株式会社 青 木 書 店

東京都千代田区神田神保町1-60

振替口座・東京 8-36582 番

電話・東京 (292) 0481 (代表)

郵便番号・101

© Ishijima Noriyuki, 1984

新栄堂印刷・高地製本

ISBN4-250-84042-5

まえがき

日本の中国にたいする全面的な侵略戦争が開始されてから、すでに半世紀近い歳月がたとうとしている。来年（一九八五年）は、日中戦争をふくむ太平洋戦争が日本の敗北におわってから四〇周年にあたり（中国にとっては抗日戦争勝利四〇周年）、三年後の一九八七年には、日中全面戦争の引き金となった蘆溝橋事件五〇周年をむかえる。日中戦争は、日本人の過半数以上の世代にとって、もはや生まれる前の事件となっていました。

しかし日中戦争が過去のすぎさった事件でないことは、一昨年、国際的問題にまで発展した「教科書問題」においてははっきりと示された。日本の中国にたいする戦争が「進出」ではなく「侵略」であったということは、中国をはじめとする内外の批判によって、日本政府も一応みとめざるをえなくなったが、南京虐殺事件など個々の問題にたいする検定は、いぜんとしてきびしくおこなわれている。さらに今年に入ってから、中学・高校の教科書から「南京大虐殺」の記述や「侵略」の用語を抹消するようもとめた訴訟が一部の旧軍人らによっておこされている。このような状況をみるならば、日中戦争をどのように評価するかは、「大日本帝国」の復権をみとめるか否かの、つまりは戦争への道を阻止しうるか否かのきわめて今日の問題であるといえよう。

私たち日本人が日中戦争を考えるうえで忘れてならないことは、中国人にとって抗日戦争が民族の生存

と再生をかけたたたかいであったということである。私たちはすでに日本の側の問題を中心に叙述した日中戦争のすぐれた通史をいくつかもっているが、中国側の問題を中心にあつかった、つまり抗日戦争の通史は、わが国ではいまだに書かれてこなかった。しかし九・一八事変（満州事変）からかぞえれば一四年間にわたる中国人民の抗日戦争の歴史を知ることなしには、私たちは日本との戦争が中国人民にとって何であつたかということも、日中戦争が日本による侵略戦争であつたことの真の意味も理解しえないであろう。

同時に抗日戦争期は、中国近現代史上の決定的な転換期であつた。中国人民にとって、抗日戦争は新中国建設のためのたたかいでもあり、抗戦後の内戦において、中国共産党が中国国民党に勝利しえたのも、抗日戦争にたいする両者のとりくみの差に由来するところが大きい。そしてこの時期の経験は、以後の社会主義建設の歩みのなかにも生きつづけてきた。したがって抗日戦争の歴史を知るとは、現在の中国を理解するうえでもきわめて重要な意義がある。

さらに中国の抗日戦争は、世界史上においても画期的な事件であつた。一九三七年夏に日中全面戦争がはじまったとき、「弱国」であつた中国が帝国主義国日本を敵にまわして八年間もの戦争をたたかいぬくだろうということを、どれだけの人が予想しえたであらうか。しかし中国の抗戦は、日本を泥沼の戦争へ、さらにはアメリカ・イギリスとの戦争へと引きこみ、最終的に日本帝国主義を敗北に追いやった決定的な力となった。また中国の抗日戦争が、朝鮮や東南アジア諸国、さらにインドなどアジア諸民族の民族解放運動と密接に関連し、相互に影響をあたえながら展開され、アジア諸民族の戦後の歴史に大きな影響をあたえたことも忘れてはならない。

ところで従来、中国でだされてきた中国現代史の通史のなかでは、抗日戦争は中国共産党および抗日根拠地（解放区）の歴史を中心に叙述されてきた（逆に、台湾でだされた抗日戦争史は、当然国民党を中心に叙述している）。この傾向は、日本人の書いた中国現代史のなかにも同様にみられる。抗日戦争のなかで、共産党と根拠地の人民がきわめて重要な役割をはたしたことは事実であるが、それだけでは、抗日戦争史として一面性をまぬがれないし、抗日根拠地の発展の歴史も、抗日戦争の全体像のなかに位置づけることによって、その意義がより明確になるであろう（最近、日本においてはもちろん、中国で書かれた通史のなかにおいても、このような一面性を克服しようとする動きがみられるが、まだ不十分である）。

そこで本書の執筆にあたっては、私は抗日戦争をできるかぎり総合的にとらえ、その全体像を明らかにするようにつとめた。そのために私がとくに注意したのは次の諸点である。第一は、抗日戦争を政治・経済・軍事（不十分ではあるが文化もふくめて）の各面から総合的にとらえ、平易な通史として叙述することである。第二は、共産党だけでなく、他の諸党派・諸勢力、とくに国民党の動きも重視することである。第三は、中国の民衆の戦争とのかかわり、すなわち戦争のなかでの民衆の苦難と成長の姿を（歴史的条件に制約された弱点もふくめて）事実にくくしてえがきだすことである。第四は、抗日戦争をグローバル（地球大）な視野にたつて叙述することである。とくに「抗日」という中国とおなじ歴史的課題になった朝鮮・東南アジアなどの諸民族の動きを重視した。

なお本書の構成も、抗日戦争を総合的にとらえるという見地にたつてた以下の時期区分にもとづいている。

第一段階：一九三一年九月（九・一八事変）——一九三七年七月

第一小段階：一九三一年九月——一九三五年五月

第二小段階：一九三五年五月（梅津・何応欽協定）——一九三七年七月

第二段階：一九三七年七月（蘆溝橋事件）——一九四一年二月

第一小段階：一九三七年七月——一九三八年一〇月（武漢・広州陥落）

第二小段階：一九三八年一〇月——一九四一年二月

第三段階：一九四一年二月（太平洋戦争勃発）——一九四五年八月（日本降伏）

第一小段階：一九四一年二月——一九四三年二月

第二小段階：一九四四年一月——一九四五年八月

この時期区分で、第一段階を一九三七年七月からでなく、一九三一年九月からとしたのは、中国の民衆にとって本格的な抗日闘争の起点は、日本の東北地方占領からであると考えからである。また一九四四年一月は、連合軍の反攻の本格化、国民党地区における民主運動の再開、解放区の局部的反攻を指標としている。

私の力量の不足から、以上のような意図が本書で十分に達成されているとはとうていいえないが、本書が読者の日中戦争にたいする理解をいくらかでも深めることに役立てば、これにまさる喜びはない。

なお本書では、日本の側の問題は、紙数の関係もあって必要最小限度しかふれなかった。日本側からみた日中戦争史については、近い将来、おなじく青木書店から出版される予定の江口圭一氏（愛知大学）の『十五年戦争史』（仮題）を参照されたい。同書が発刊されれば、本書はその姉妹篇ということになる。

凡 例

一 引用文または参考文献は、本文中の（ ）内にその書名あるいは論文名のみを記し、巻末の参考文献目録に詳記した。

一 引用文のうち邦訳があるものは、邦訳の書名を記し、原題は参考文献目録に記載した。

一 中国共産党関係の文献は、とくに記さないが、日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』（全一二巻、勁草書房）より引用した。

一 地名は当時のものによるのを原則とした。なお抗日根拠地（解放区）の呼称などは、慣行的に省名の別称（または略称）が用いられているので、以下に列記する。

熱 ^{ケイ} 熱河省	察 ^{チヤウ} 察哈爾省	綏 ^{スイ} 綏遠省	寧 ^{ニン} 寧夏省	甘 ^{カン} 甘肅省	魯 ^ロ 山東省	冀 ^イ 河北省
豫 ^ヨ 河南省	陝 ^{シェン} 陝西省	蘇 ^ス 江蘇省	浙 ^{チヤウ} 浙江省	皖 ^{ワン} 安徽省	閩 ^{ミン} 福建省	贛 ^{カン} 江西省
鄂 ^オ 湖北省	湘 ^{シェン} 湖南省	川 ^{チュワン} 四川省	黔 ^{チン} 貴州省	粵 ^{ユエ} 広東省	桂 ^{クイ} 広西省	滇 ^{テン} 雲南省
晋 ^{シン} 山西省						

目次

まえがき〔iii〕

凡例〔vii〕

I 九・一八事変

1	日本帝国主義の中国東北侵略	5
	柳条湖事件と不抵抗主義	5
	分裂状態にあった中国	6
	半植民地	
	半封建社会	8
	抗日民衆運動の高揚	10
2	一・二八事変	12
	孫科政府の成立	12
	国民党支配の動揺	14
	中国共産党の左傾路	
	線 15 軍民一体の上海の抗戦	17
3	国共内戦	20
	蔣・汪合作政権	20
	安内攘外政策	21
	東北の抗日武装闘争	24
	関内の抗日運動	25
	第五次「围剿」戦と紅軍の長征	27

II 抗日民族統一戦線への道

1 親日政策と華北分離工作 31

親日政策の進展 31 恐慌の深刻化と幣制改革 32 華北分離工作の

強行 34 八・一宣言 35 蔣・汪合作政権の終焉 38

2 救国運動の発展 39

一二・九運動 39 全国各界救国連合会の成立 41 中国共産党の政

策転換 43 逼蔣抗日 45 国民政府の対日姿勢の強化 46

3 西安事件 47

綏遠事件 47 西安事件の勃発 48 蔣介石の釈放と国民党三中全

会 51 開戦前の中国の抗戦力 54

III 抗日戦争の勃発と拡大

1 抗戦の発動と国共合作の成立 59

蘆溝橋事件 59 抗日民族統一戦線の成立 61 戦線の拡大 62 上

海の戦争 65

2 抗日根拠地の形成 68

中国共産党の抗戦戦略 68 晋察冀抗日根拠地の成立 70 各地の抗

日根拠地 72

3 抗戦体制の前進と武漢防衛戦 74

列国の対日有和政策 74 トラウトマン工作 76 抗戦体制の強化 78

4 台児莊の戦いと徐州会戦 79 「持久戦論」 81 武漢防衛戦 83

戦争の惨禍 85 南京大虐殺 86 難民問題 88 民衆の対応 90 中
国を支援した外国人たち 93

Ⅳ 戦争の長期化

1 国民党一党独裁と憲政運動

汪精衛の対日投降 99 蒋介石独裁体制の強化 100 第一次反共高
潮 101 中国軍の冬期攻勢 104 国民党の民衆動員 106 憲政運動 108

2 抗日根拠地の拡大

中共六期六中全会 110 反「掃蕩」戦 111 解放区の発展 113 根拠
地建設と民衆動員 115

3 経済戦争

戦時経済政策 118 通貨戦争 120 奥地工業建設 122 工業合作社 124
解放区の経済戦争 125

4 抗戦体制の危機

世界大戦の勃発と中国 126 国民党の動揺 128 「新民主主義論」 130
百团大戰 131 国際情勢の好転と皖南事件 133 太平洋戦争前夜の中
国 135

V 太平洋戦争時期の抗日戦争

1 太平洋戦争の勃発 141

連合軍の対日戦略 141 太平洋戦争前期の中国戦場 142 日本の中国

占領地支配強化政策 145 東北の戦時体制と抵抗 146 「大東亜共栄

圏」の実態と抗日運動 148

2 国民党支配の腐敗と反動化 151

国民党の戦場の停滞 151 ファシシ的独裁体制の強化 154 経済的

危機の拡大 156 民衆生活の破綻と抵抗 159

3 解放区の危機とその克服 161

三光政策 161 抗日根拠地の危機 163 減租減息と大生産運動 164

整風運動 167 遊撃戦争 169 日本人兵士の反戦運動 172

VI 第二次大戦末期の中国戦線

1 中国戦線の新展開 177

太平洋戦局の転換 177 ビルマ反抗作戦 178 日本軍の大陸打通作

戦 181 解放区の反攻の開始 184

2 国民党統治の危機 186

アメリカと中国 186 米軍事視察団の延安訪問 188 民主化運動の高

揚 189 スティールウエル事件 192

3 二つの党大会 194

連合軍の総反抗と民族独立運動	194
ルタ会談 197	
アメリカの援蔣政策と国民党	198
国民党六大会	200
中国共産党七大会	201
4 抗日戦争の勝利	203
抗日戦争の最終段階	203
抗日戦争の終結	204
5 戦後史の起点	207
付録資料・別表	211
中国軍の指揮系統(1)～(3)	
八路軍の指揮系統	
新四軍の指揮系統(1)・(2)	
国民政府軍事委員会の組織	
別表 1 中国軍の死傷者数	
2 抗日戦争期間の省別徴兵数	
参考文献 [217]	
あとがき [228]	

中国抗日战争史

I
九・一八事変



最後の勝利までたたかおう（陳煙橋）

